

世界的な普及に拍車がかかるNDC

国際航空運送協会（IATA）が世界的に普及促進を図っている航空券流通の新しい仕組みである「New Distribution Capability（NDC）」を巡って、国内でもインフィニットラベルインノメーションがNDCに対応した新しい機能の提供を開始するなど、具体的な取り組みが動き出しています。旅行業界にも様々な影響を及ぼすことが予想されるNDCについて、これまでの経緯と現状を紹介します。

航空旅行の効率化 利便性も向上

IATAは、航空券流通の近代化を目指すIATAが取り組んでいる重要プロジェクトのひとつで、2014年8月の米国運輸省による承認を経て、2015年9月には初版のNDC規格が制定されました。

NDCでは、従来の「旅客からの申し込みによる予約発券」から、「航空会社が顧客の要望に応じたオファーマネジメント・オーダーマネジメント」が可能になります。まず最初に航空会社がNDCで手掛けたのは付帯（アンシラリー）サービスの販売でした。従来の座席を販売することに加え、機内サービスをグラフィックと共に情報提供し、旅客への訴求を高めきました。旅行会社もNDCの規格に準拠したシステムを使うことで、グラフィックスや動画など多様なコンテンツを通じた旅行者へのサービス提供や商品販売を行えるようになります。

また、不特定多数への画一的なお知らせではなく、個人の嗜好に応じカスタマイズ

した形でオファーすることも可能です。（オフアーマネジメント）

さらに、NDCの技術情報が公開されていくことから、数多くのIT企業が新たな商品情報の発信や新規マーケットへの参入をサポートするためのテクノロジーを開発しており、様々なビジネスチャンスの創出に対する期待も高まっています。

IATAのアレクサンドル・ドゥ・ジニ（アック）事務総長は今年6月、シドニーで開催されたIATA年次総会における報告の中で、「貿易戦争の機運が高まっている」状況に懸念を示して保護主義の拡大を警戒すると同時に、「グローバリゼーションがもたらす恩恵は計り知れない」と自由貿易の重要性を強調。

その一方で、最小限の政府規制の中で様々な「グローバルスタンダード」を展開する重要性に言及しました。ジュニア事務総長は、10年前にグローバルスタンダードとしてEチケット100%化を実現した経緯を参考し、IATAが世界的な展開を目指すNDCの普及

RSの発展形であるグローバル・ディストリビューション・システム（GDS）も、文字で発券情報がやり取りされていた時代の航空ビジネスの流れを汲むCRSと同様に、それらのシステムは「文字」で情報を表現することを前提として、個別のシステムが固有のプログラム言語によって作動する仕組みになっています。

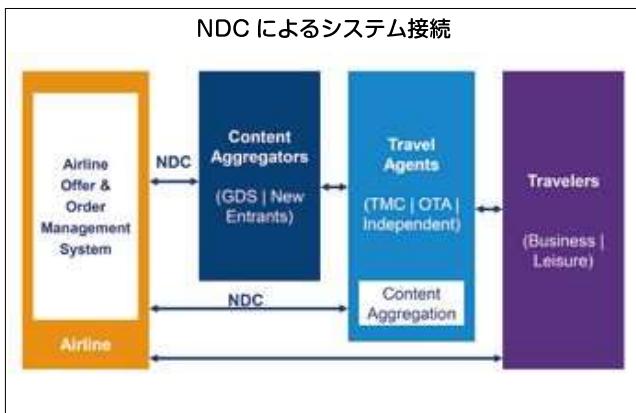
一方、NDCの場合、XMLという自由度の高い世界共通のプログラム言語の規格であることから、情報も「文字」だけでなく「画像」や「動画」など様々な形式によって表現され、XMLベースの様々なシステム間での情報交換に優れ、ユーザーインターフェースも全ての利用者にやさしいといった利点を備えていると言われます。

すでに海外では、航空会社がNDCに準拠した「ダイレクト」「ネクト」と呼ばれる自社便の航空券販売に特化したツールを旅行会社に提供しているケースも広がってきているようです。

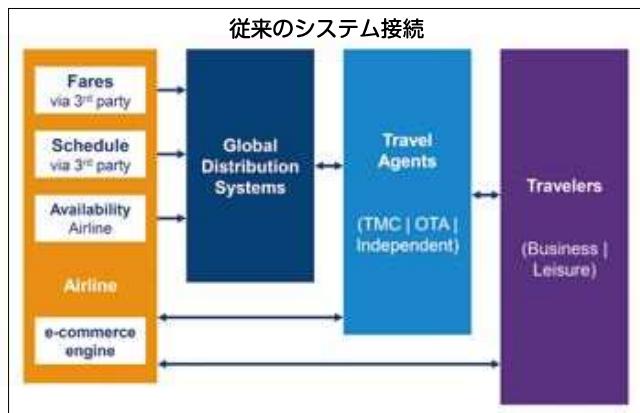
XMLを利用 NDC利用が本格化の兆し

その開発と普及の歴史が1960年代まで遡る航空券のコンピューター予約システム（CRS）は「世界で最も古いEコマース」と言われるほど長い歴史を持つものです。航空券だけに限らず広く旅行に関わるサービスや商品なども取り扱うようになったC

RSの発展形であるグローバル・ディストリビューション・システム（GDS）も、文字で発券情報がやり取りされていた時代の航空ビジネスの流れを汲むCRSと同様に、それらのシステムは「文字」で情報を表現することを前提として、個別のシステムが固有のプログラム言語によって作動する仕組みになっています。



出典:IATAホームページより



卷頭特集 NDC 航空券流通の新たな仕組み



インフィニトラベルインフォメーションの植村公夫代表取締役社長（左）と平林良章常務取締役



アメリカン航空ディストリビューション・ストラテジーの渡辺雄次マネージャー

空運賃やサービスなどの比較検討ができる上に、ホテルをはじめ航空券以外の旅行に関わる素材が取り扱えず、その利便性には問題が生じることになります。この問題を解決するため、複数の航空会社によるNDC接続をまとめて、横断的な検索ができるようになる「アグリゲーター」と呼ばれる企業も登場してきました。トラベルフュージョンやエーアゲートウェイ、エアラインテクノロジーなどが、アグリゲーターの代表的な会社として知られています。

これまでGDS接続とLCC接続のサービスを提供してきたインフィニトラベルインフォメーションでは、今年4月よりNDC接続への取り組みを開始し、国内でもNDC規格のシステム利用が本格化する形となりました。

インフィニトラベルインフォメーションの植村公夫代表取締役社長も、「想定している『アンシラリー』をNDCを用いて売れるよう」にしようという方向性は、トラベルフュージョンのシステムを利用しているLCCと変わらず、2000年代からトラベルフュージョンがやつてきた機内サービスを有料販売するLCCの手法をサポートする考え方にも重なるものだらう」と指摘。同社によるNDC

キャリア直売に負けないツールに

インフィニトラベルインフォメーションの平林良章常務取締役によると、同社が提供しているLCC接続の機能は、世界的なLCCのアグリゲーター的存在であるトラベルフュージョンのシステムを利用したもので、3年ほど前からアリティッシュエアウェイズのNDCを始めたトラベルフュージョンとの話し合いなどを通じて「日本でもNDCの時代が早晚やってくる」という判断にいたり、今年4月からNDC接続の取り組みに踏み切ったといいます。

インフィニトラベルインフォメーションの植村公夫代表取締役社長も、「想定している『アンシラリー』をNDCを用いて売れるよう」にしようという方向性は、トラベルフュージョンのシステムを利用しているLCCと変

C接続によって、インフィニを利用する旅行会社も、自社サイトでの直売を強化しようとしている航空会社と同様の航空券や「アンシラリー」の販売が可能となることから、NDCの登場によって旅行会社が、そうした付加価値を伴う形で販売力を強化していくば、航空会社の直売に負けないビジネスを開拓することもできると思う」という見方を示しています。

平林常務取締役も、「GDS接続とLCC接続、NDC接続の機能を並行して利用できるインフィニをベースに、カウンターでの人的なサービスを通じて顧客満足度を高め、店舗での販賣を作り出していくことで、航空券販売を拡大していく」という旅行会社ならではの新たな展開もできるのではないか」と旅行業界への期待を語っています。

NDCの活用を

海外旅行2000万人へ



代理店の画面からログイン後のNDC画面イメージ

JATAも謳つてきている付加価値創造産業を目指す旅行業界としては、世界的に航空会社が路線マネジメントを強化してきている中で、日本での航空座席販売の収益性を高め、日本発路線におけるバリエーションやサービスの強化、輸送力の拡大につながっていくよう、航空会社やIATP、プロバイダーと一緒に知恵を出し合いながら、新しい航空券流通規格であるNDCを活用できるように工夫を重ねますます多様化する旅行客ニーズに的確に対応することが、海外旅行2000万人時代の実現に向けても求められているようです。

IATAのNDCリーダーボード航空会社のメンバーに名前を連ねるアメリカン航空も、NDCに早くから取り組んできた航空会社の一つです。

辺雄次マネージャーは、日本でのNDCを巡る現状について、「これまで航空会社からの情報提供先はGDSが中心だったが、NDCの登場によって旅行会社やIATPプロバイダーなど、より多くの皆さんにより簡単に多くの情報を提供できるようになつた。現在は、NDCを活用したシステム構築に向けて、旅行会社やIATPプロバイダーなど、一緒に走っていくパートナーを探している段階にある」と説明。「航空会社としては、システムを最終的に構築することになる旅行会社やIATPプロバイダーなどが、将来的にどういった予約・発券システムを実現し、どういう形で競争力を高めようとしているのか、具体的なアイデアを持つている方々と話し合い、積極的にサポートしていくべき」との考えを明らかにしていま